

## 史家沈既済の夢

### —中唐期における伝奇と史学の交錯—

宮岸 雄介

(国語国文学〔中国語〕学科目)

(令和四年十二月二十六日受理)

#### はじめに

中唐期<sup>①</sup>に、にわかに「伝奇」と呼ばれる作品群が大量に書かれたことは、中国文学史上周知に属する事実である。しかし、なぜこの時期にこのような作品群が盛んに書かれたのか、また、そもそもどのような意図で一連の奇抜な現象を描く物語が創作されて行ったのか、という本質的な問題に対しては、すでに先行研究で多く考察されているものの、決定的な究明にはまだ及んでいないことも否めない。中唐は、唐王朝の歴史を二分することになった大乱、安史の乱(七五五〜七六三)直後の時代であり、前半の律令制を骨子とする唐王朝の根幹が崩れ、社会制度が大きく変化した時代であった。唐王朝前半の宮廷を牛耳っていた門閥貴族に対抗すべく、新興の科挙

合格者らが中心となる官僚勢力が拡大して宮廷内の権力闘争が激化した。そして、不安定になった経済的基盤を立て直すべく、税の現物納入を貨幣での納税制度へと税制の仕組みも変化するといった具合に、社会経済面では大変革を迎えていた。こうした社会の転換期に、その時代風景を活写する伝奇が流行したという意味は大きい。

そもそも中唐に書かれた物語の作品群が「伝奇」という名称のもと分類されたのも当時の見解ではなく、晩唐から宋代にかけての目錄学的な見識で便宜的になされたもので、<sup>②</sup>当時の作者たちがいかなる視点からその物語を創作したのかについては再検討する余地も残っていると思う。

伝奇の先蹤をなすと言われる六朝志怪も、当時の意識では文

学作品としてではなく、史書には載せられない奇怪なる事実を記録した史書であるという認識で編まれていたことも常識であるように、史学と志怪、伝奇とは密接な関係がある。奇怪なるものを伝えるという「伝奇」は、それぞれの作品名に「伝」とつけられることが多いように、史伝の書法に則って書かれていることも非常に示唆的である。また、伝奇の多くの作者は史才のある者、あるいは当時の史書を編纂する史官である場合も認められ、史学と伝奇の深い関わりを暗示している。ただ、伝奇は奇怪なる事実を題材とする六朝志怪以来の伝統、すなわち人智では計り知れない事件を扱っても、主題はあくまでも人間社会や人間性の問題がメインで描かれ、単なる事実の羅列では終わっていない。単に事実を記録した記事の様相を呈する志怪に比べて、伝奇は作者の創意と主張が明確に示された一つの作品に仕上がっている。

通説では、歴史学の産物である志怪が虚構の物語を創作する伝奇へと展開し、ここに所謂小説の誕生を認めるようにみなされてきている。<sup>4</sup> 伝奇の物語の中には、志怪で使われた題材をそのまま踏襲したのも散見する。それらを比較すると、伝奇は志怪よりも描写を詳述し、伏線をもたせた見事な構成からなるものに昇華させ、分量的にも何十倍にも膨らませたものに仕上がっており、通説は明らかに十分首肯しうるものであることが認められる。ここには確かに作者の文学者としての才能の開陳が見えるものの、上述の通り、伝奇は志怪以上に史書の形式を模している点、さらには史書と関わる著

者が史書では語り得なかつた思想などが直接的に描いている場合が多く、伝奇という新しい表現手段によって史家がめざした本音の主張を窺うこともできそうである。このように伝奇の作者を史家として捉えて眺めてみると、作者が目指した伝奇の創作意図がより明確になっていくように思う。

唐代は史学が経学から独立した時代である。それは唐初に編纂された『隋書』経籍志の図書分類、すなわち「経・史・子・集」の一つとして「史書」のために独立した部立てが設けられたことから明確であるが、単に六朝隋唐を経て史書の編纂数が増えたという現象だけではなく、その背後に独立した学術としての史学の思想が確立したという本質的な原因も具体的に分析していかなければならぬ。経学から独立した史学は、表現方法を文学のそれに求めていたと考えると、史家であつた著者が文学作品である伝奇の創作に熱中したことは重要な意義があつたはずである。すなわち中唐にわかに行きを見た伝奇が史書の書法に依拠し、さらには史才がある文人あるいは史官によってそれらが書かれた、その動機を考えていくことは、独立した史学の精神の一面を明らかにすることにもつながっていく問題であるとも考えられる。

伝奇を代表する「枕中記」や「任氏伝」などの著者とされる沈既済も正史の本伝が伝えるように、『建中実録』という史書を書いた当時を代表する史家であつた。本論では沈既済（七五〇～八〇〇）の史論と伝奇作品の主題を検討し、中唐に伝奇が流行した背景、唐

代に発展した史学思想が伝奇を通じていかに發揮されていったかという問題について考察していきたい。

## 一、沈既済の史論

唐代は六朝以来の名門貴族中心の宮廷政治が崩壊し、新興の科挙合格者である官僚たちが政治社会に進出していく過程の時代であった。唐初から圧倒的勢力を誇ってきた貴族たちに対抗して、中唐以降になると新興の官僚たちは徒党を組み、両者の権力闘争は激化して、両者が真つ向から対立したのが牛李の党争（八〇八～八四九）である。図らずも新興官僚側の領袖であった牛僧孺（七七九～八四七）は、伝奇を集めた『玄怪録』の編者であったことでも知られる。このように伝奇は新たに台頭してきた官僚たちによって書かれた文学であったことをまず確認しておきたい。そのため、伝奇の主人公は、科挙の受験生、その合格者、不合格者となることが多く、伝奇は新興官僚たちの目を通して描かれた物語であったのである。

当時、行巻という受験生の文才を予め試験官にお目通ししたくという風習があった。試験科目でもあった詩がその対象であったことはすでに論証されているが、実は伝奇も行巻のために書かれたのではないかという説がある。論拠としては、史才、作詩、議論の三能力が求められる科挙<sup>5)</sup>に、これらすべての要素を含むことができる伝奇は利用しやすかったのではないかというものであるが、現存する伝奇はすべてが三技能の内容を含むものではなく、試験準備のた

めの作品であったと断定するには証拠として不十分とされ、行巻と伝奇の関係については未解決のままである。

とはいえ、試験対策として三要素ないしはそのうちの数要素が備わっていること、すなわち形式的には史書のそれを踏襲し、作品によつては物語の展開時に効果的に詩を引用しているものがあつたり、自説をストーリーから見事に自分の思想を論証する議論の文が備わっていること自体が伝奇の特色となつている。そして、中唐以降の伝奇はおおむね所謂古文で書かれており、唐初の小説が四六駢儷体で書かれていたことは対象的で興味深い<sup>7)</sup>。これは完全に小説の書き手が、所謂門閥貴族の作者から新興の官僚勢力の文人たちへと移り変わつて来たことを示している。行巻と伝奇の関わりは論断できず、古文の宣伝のために伝奇が書かれたという説が否定されても、当時の科挙が求めるような内容、文学が新たに創始しようとしている文体を兼ね備えているのが伝奇というものであつた。

そのような伝奇の作家であつた沈既済の史家としての主張を見ていくことにしよう。沈既済は『旧唐書』卷一四九、『新唐書』卷一三二ともに伝記が見える。それぞれほぼ同じ内容を伝えるが、ともに歴史家が分類されている巻に立伝されており、正史の史家から沈既済は唐代の代表的史家として認められていたことを物語っている。『新唐書』は沈既済自身の独立した伝記が立てられているが、『旧唐書』は息子傳師伝の中に紹介されている。

沈傳師、字子言、吳人。父既濟、博通群籍、史筆尤工、吏部侍郎楊炎見而稱之。建中初、炎為宰相、薦既濟才堪史任、召拜左拾遺、史館修撰。既濟以吳兢撰『國史』、以則天事立本紀、奏議非之曰、『旧唐書』卷一四九)

沈傳師の父既濟は多くの書籍に広く通じて、史書を書くことに長じていたことが、楊炎(七二九〜七八一)に認められた。建中(七八〇〜七八三)の初めに、炎が宰相となり、沈既濟を歴史編纂の仕事に推薦し、左拾遺、史館修撰に就いたとある。沈既濟は呉競の『國史』が武則天のために本紀を立てたことを批判して奏上したという。

ここに出てくる楊炎という人物は、均田制に代わるかの両税法という新しい税法を実施した、当時のやり手政治家で、新興の官僚グループのリーダーであった。その人物に見いだされて史家として活躍し始めたことは、沈既濟が新興官僚として中央政界での活躍が約束されたことを意味している。そして、楊炎の失脚はそのまま沈既濟の左遷をも意味し、実際に沈既濟も中央政界から追われる経験を持っていた。彼の代表作「枕中記」は、科挙不合格の盧生が夢の中で、科挙合格を皮切りに中央政界で立身出世を果たし、その後何度も浮沈する官僚の生涯を短時間に概観する物語である。こうした物語の着想は、実際に中央政界で活躍し左遷された、沈既濟の実体験

とその感慨がそのまま反映して初めて創作できるものであったと言えよう。

沈既濟の史家としての活躍のトピックは、唐初に編まれた史書批判である。先の引用文に続く沈既濟の史論を要約すると以下のとおりである。

沈既濟は史学の伝統的な目的として『春秋』の義に則り、社会のあるべき秩序を示すことであるという議論から説き起こし、皇帝が存在するにも関わらず、自ら帝位に就き政治を行った則天武后は皇帝と呼ぶにはふさわしくなく、本紀から外すべきだと意見したのであった。論証の中で、きちんとした呼称を用いるという儒家の「正名」を史書も実践していくべきであると示した。

史学は儒学の精神を史実から汲み取り、それを正確に記録すべきものであると主張するが、沈既濟もこうした史家としての正統な見解を持ち合わせていたと紹介されている。しかし、その意見は結局は聞き入れられなかったと、両唐書はこのエピソードを結んでいるように、新興勢力であった官僚グループにその時代は順風が吹いていなかったことも暗に示している。

ここで沈既濟は皇帝の正統性を遵守するという儒学の思想から則天武后の呼称と本紀立伝について非難しているのであるが、彼が直接批判の対象とした『國史』は、唐初を代表する史家たちの共同編纂で、その中に劉知幾の名前も見える。<sup>8)</sup>劉知幾は上述のような史家の精神を闡明にした史論書『史通』の著者であり、呉競のみならず

唐初の史家たちがすべて沈既済によって批判されていることは注目すべきことである。沈既済は則天武后立伝の前例を次のように示す。

或曰、班、馬良史也、編述漢事、立高後以續帝載、豈有非之者乎。答曰、昔高後稱制、因其曠嗣、獨有分王諸呂、負於漢約、無遷鼎革命之甚。況其時孝惠已歿、孝文在下、宮中二子、非劉氏種、不紀呂後、將紀誰焉。雖雲其然、議者猶為不可、況遷鼎革命者乎。〔旧唐書〕本伝)

ある人が尋ねるに、司馬遷や班固は良史の誉れ高いが、漢王朝を記録した際、呂后を本紀に載せて皇帝を後に続けているがこれは間違えているのではないかと。沈既済は答えている。昔呂后が政治を行い、呂一族を王として、天下を我がものとしたが天命が変ったわけではなかった。その時惠帝が亡くなり宮中にいた二人は劉氏の血を引き継ぐものではなく、呂后を王朝の中心に据えないで誰を据えようというのか。議論する者はこの判断を不可としているようだが、事実上正統なものが空位になつていふのだから、呂の場合は仕方がない。唐の中宗の場合には状況が違い、天命が改まって即位しているのだ。則天武后ではなく中宗を基準に史書を書くべきである。

と主張している。沈既済は女帝そのものを否定するといふのではな

く、歴史の時間軸としてやむを得ない場合は女帝の本紀も認めているのである。こうした考え方は、図らずも劉知幾も沈既済と同じように持っていた。そして、同じく呂后本紀立伝を題材として以下のように語っているのである。

劉軌思商榷漢史、雅重班才、惟譏其本紀不列少帝、而輒編高后。案弘非劉氏、而竊養漢宮。時天下無主。呂宗稱制、故借其歲月、寄以編年。而野雞行事、自具『外戚』。譬夫成周成王。為孺子、史刊攝政之年、厲亡流彘、歷紀共和之日。而周、召二公、各世家有傳。句必有誤、詳此句當云「各有世家」。班氏式遵曩例、殊合事宜、豈謂雖浚發于巧心、反受嗤于拙目也。〔史通〕卷九 鑑識篇)

というように、呂后本紀立伝に反対する北齊の劉軌思の説を反駁しつつ、皇帝不在の折に実際の政治は呂后の手によってなされていたのだから、その時間帯の本紀に呂后を据えることは正しいとしている。呂后の事績は外戚列伝に述べているので問題はない。そして、その時代の時間軸として呂后の年月で歴史をまとめることは、周の成王が幼少の折に周公の年月で記録した前例に基づくものとしていふ、として班固の判断を的確なものとしているのである。

ここでは、劉知幾が女帝が在位していることよりも、正確に時代の時間軸を据えることを重視していることが注目される。

実は、六朝時代には北斉の劉軌思ばかりではなく、女帝そのものを否定するという考え方が根強かった。梁の劉勰も「雌鳥に時を告げさせぬ」と女帝の存在そのものを否定し、司馬遷や班固が呂后のために本紀を設けていることを経書の精神に背いたものであるとしている。<sup>9)</sup> 儒学の精神を示すべき史学では、こうした考え方が主流であった中、唐代に至りその意識は微妙に変わってきている。すなわち沈既済が、劉知幾の史学精神をしっかりと受け継ぎているように、紀伝体の本紀は、その時代の時間軸であり、歴史の基準としてそれは記録しなければならぬという、史実の正確な把握とその叙述方法が確立してきていることが確認できるであろう。しかし、沈既済の最後の結論が則天武后立伝批判に向かっていることは興味深い事実である。これは、沈既済にとって則天武后は遠い過去の時代になっているため、ある程度、本質的な批判が許される時代になってきていることによるものと容易に想像できる。それとともに、沈既済はここで儒学の発想により近づき、遷鼎革命という正統な手続きを踏んでいない則天武后の実情を否定しようとしていた。唐代において史学は儒学から独立すべく、より合理的な法家など儒家以外の思想へ傾くようになっていく中、沈既済の史学はより保守的に儒学思想を厳守していこうとするものであったことが窺えよう。<sup>10)</sup> また、女帝の存在よりも紀伝体は本紀でその時代の時間軸をきちんと定めなければならないという、劉知幾が明確にした史学としての方法論が引き継がれている事実もここで確認しておきたい。沈既済の伝奇の

代表作「任氏伝」は異類婚姻譚の名作であるが、そこには人間の婦人でもなし得ない儒家における女性の美德が描かれている。則天武后に対する批判には、こうした価値観に端を発するものであったとも言えそうである。

それでは、沈既済は則天武后の時代をどのように見ていたのだろうか。

禮部員外郎沈既済曰、「初、國家自顯慶以來、高宗聖躬多不康、而武太后任事、參決大政、與天子並。太后頗涉文史、好彫蟲之藝、永隆中始以文章選士。及永淳之後、太后君臨天下二十餘年、當時公卿百辟無不以文章達、因循遐久、寢以成風。〔通典〕卷八選舉典歷代制下」

沈既済が言うには、国家は顯慶年間以来、高宗の健康が及ばなくなり、武太后が政治を行い天子と並ぶようになると、則天武后自身も文史の学問を涉獵し、美麗な文章を作ることが好み、永隆年間には文才で官僚を登用する事になったとし、永淳年間の後には、則天武后はすでに天下に二十年あまり君臨し、当時の宮廷の役人で文章力のない者はいなくなり、その風は今に続いている。

六朝門閥貴族たちのステータスシンボルでもあった、こうした美文

を重んじる風潮について、新興官僚たちは常に批判的で、それが中唐には古文復興の思想へと結実していくのは周知のとおりである。次に、沈既済のこうした風潮に対する見解の背景を検討すべく、中唐期に見える新興官僚の科挙をめぐる議論を見ていくことにしよう。

## 二、中唐期における新興官僚の科挙論

沈既済は、則天武后から本格的に始まった科挙による官僚の登用が玄宗の開元年間になるといよいよ盛んになり、以下のような様相を呈してきたという。先程の指摘に続けて、

故忠賢傳彥韞才毓行者、咸出於是、而桀姦無良者或有焉。故是非相陵、毀稱相騰、或扇結鉤黨、私為盟畝、以取科第、而聲名動天下、或鉤摭隱匿、嘲為篇詠、以列於道路、迭相談訾、無所不至焉。〔通典〕卷八選舉典歷代制下)

文章による選抜で、確かに優れた人材を輩出しているが、一方では品行方正ではない無能な者も出てきてしまっている。そのため互いに軋轢が生じたり批判し合い、あるいはグループを作って密かに通じ合って、合格を勝ち取ることでも名声を天下に轟かしたり、秘密を引き出して人を貶める文を書き、同じ考え方に沿ってお互いに仲間の誓いを立てたりという悪習があちこ

ちで生じていた。

唐代から宋代にかけて、門閥貴族が解体し、新興の官僚集団が台頭してくるが、その勢力図は貴族対官僚というように単純に色分けできる簡単な構造ではなかったようである。すなわち、後世からの視点に立つと、新興官僚側にとっては、自分たちの勢力拡大のきっかけとなった則天武后の時代は評価すべき画期であったと思われるが、実際には、逆に文才重視の人材登用が政治を墮落させるきっかけを作った悪政時代だった、という評価が中唐の新興官僚より多くなされているのである。そもそも六朝貴族時代を象徴する文飾の風潮は、唐代に新たに台頭する新興の勢力、すなわち科挙の合格者たちが批判しそれを超克していくべき存在であったのであるが、実は科挙受験者の中には、唐代には没落していた貴族の子弟も参加しており、貴族勢力と官僚勢力とは必ずしもきれいに白黒つけられるものでもなかった。則天武后の側からすると、自分に従わない旧来の貴族層は邪魔な存在で、科挙によって選ばれてくる新興の官僚たちの方が忠実な部下になりうるので、余計に科挙優遇、その科目である文芸をより重視していったのである。しかし、同時代の新興官僚たちからは、六朝以来の学術や文芸を試験範囲とする科挙そのものの性質は歓迎されるものではなかったという構造になっていたのである。

こうした矛盾を抱えながら、政界では、地方で権力や武力を持つ

た節度使や科挙合格によって新たに政界に進出してきた新興官僚たち（没落貴族らも含む）によつて、中央の貴族層中心の勢力を駆逐すべく大きな衝突を起こした。これが安史の乱などに結実していったのである。一方では、混乱した国内にあつて、逃亡する農民が急増し、均田制による税収で国政が賄えない大きな経済問題も生じていた。官僚たちはこうした問題の解決も迫られていたが、これらの経済問題に関してはまた後ほど考えることにする。

隋代から始まつた科挙は、名望貴族の血統を必ずしも必要とせず、江湖に有能な人材を求める資格試験であつたのであるが、その科目の内容は、六朝以来貴族が作り上げてきた文化遺産の習得度をたためすものであつた。もちろん、唐代中頃までの文化創造の中心は門閥貴族たちであり、新興の官僚たちにはそれに代わる思想や文学というものをまだ持ち得ていなかった。それが古文という文体、新しい春秋学、天人非相関説という形で、新興官僚の中から胎動し始めてきたのがまさに中唐という時代だったのである。それでは、具体的に中唐の新興官僚たちは科挙についていかなる見解を抱いていたのであろうか。次に沈既済と同時代に生きた学者の意見を見てみよう。

春秋学者として知られる趙匡は、科挙制度の十の弊害を列挙している。この中で、科挙に出題されている内容に関する意見を見ていこう。科挙の中で一番重視された進士科の試験の実情について以下のように言う。

夫才智因習就、固然之理。進士者時共貴之、主司褒貶、實在詩賦、務求巧麗、以此為賢、不唯無益於用、實亦妨其正習、不唯撓其淳和、實又長其佻思。自非識度超然、時或孤秀、其餘溺於所習、悉昧本源。欲以啟導性靈、獎成後進、斯亦難矣。故士林鮮體國之論、其弊一也。（『通典』卷十七選舉典雜議論中）

もともと人の才智というものは学習によつて身につけられるものである。進士なる者もこのことを貴んでいるが、試験官の方は詩賦の表現に優れた者を選抜している。これは役に立たないことであるばかりか学習そのものを阻害するし、淳和な心情を乱すだけでなく軽薄さを冗長している。有能な人材も一定数選ぶことができても、学習すること自体が混乱していて本源を見失つていくことが多い。性靈を啓発して後進を育てることとは難しくなっている。そのため、宮廷の役人たちは国家政治を論じることが少なくなつてしまつていて、これが一つ目の弊害である。

要するに、科挙で一番重要視されている進士科の試験は、六朝以来の美麗な文学を巧みに作る能力のみが問われて、人間として大切な淳和な心は問われず、性靈を養い育てることになっていないといふのである。それでは、人間の内面、思想を試す科目について、科挙の実情はどのようなものであつたのだろうか。



唐代統治のイデオロギーとして重んじられた経学が試験科目である明経科について、趙匡は第三の弊害として、

疏以釋經、蓋筌蹄耳。明經讀書、勤苦已甚、其口問義、又誦疏文、徒竭其精華、習不急之業。而當代禮法、無不面牆、及臨人決事、取辦胥吏之口而已。所謂所習非所用、所用非所習者也。故當官少稱職之吏、其弊三也。（『通典』卷十七選學典雜議論中）

疏は經文を解釈する案内に過ぎない。受験生たちは經義を明らかにするために読書し、苦勞して勉強して、經義の意味を問うため、注釈である疏の文を暗記し、ひたすらその精魂を出し切つて差し迫つていない學問を習う。そうして同時代の礼法には疎く、事柄を決断することに臨んでは胥吏に代弁してもらわなければならない。学んだことは役に立たず、役に立てることは学んできていないのである。そのため、官僚として職にかなっている役人が少ないのが三つ目の弊害である。

唐代は太宗が制定した『五經正義』の解釈を統治の理念とし、官僚はそこでなされた解釈、すなわち注疏を学ぶことが求められていた。そのため、經典本文そのものに直接向かい合うのではなく、注疏の解釈が大事であるという本末転倒の學習が強要されてきた。新興官僚たちは、六朝以来の義疏学を集大成した唐代の訓詁学に思想

が拘束されることに反発を抱いてきたのであろう。こうした動機から、注疏に囚われず本文そのものから經典を解釈しようという新しい經典觀が生まれ、その成果となったのが中唐期に世に出た啖助、趙匡、陸淳らの春秋学であった。趙匡のここでの意見は、彼が創始した學術の主旨をも明確に示したもので、注疏の漢魏時代よりさかのほり先秦の文そのものに回歸しようという發想は、まさに古文復興の思想とも主旨は一致し、中唐の新興官僚たちの共通の認識になっていたと思う。ここでの趙匡の論点をまとめると、

- ① 人の才能や知恵は後天的な學習によつて身につけられていくものである。
- ② 學問は六朝以来の美辭麗句を並べる内容空疎な文芸を廢し、人間の本質的な性靈を涵養していく思想を学ぶものでなくてはならない。
- ③ 經学は注釈ばかりに拘泥せず、本文そのものと向かい合つてその真意を理解していくべきである。
- ④ 實際に運営されている唐代の礼法の意義を理解し、經学も机上の空疎な内容ではなく実地の政治運営に役立つ内容として学ぶべきである。

ということになる。特に①は、唐代の新興官僚たちの信念の強い支えとなっている考え方である。これは続く宋代の官僚たちにも受け

継がれる意識になる。そもそも、人間の「性」を上・中・下の三品格に分け、中品は努力次第で上品にもなれるし、怠けていれば下品になるといふ、孔子以来の儒学の人間観に基づく考え方である。そして、韓愈が書いた「原性」にまとめられているように、唐代の人間観となっていた。特に、中品の人々を教育し才智を身につけさせるという発想は、礼楽による教化を主張した荀子の思想に近いもので、難関の科挙受験を乗り越えていくためには、受験生は必ず持たなければならぬものであり続けたと思う。

②と③は六朝貴族文化に対する否定で、これらは文化の問題としては古文や春秋学などの新しい学術を作り出していくこと、また社会的問題としては政界から貴族階級の官吏を追い出すという権力争いに通じる考え方になっていく。そして、新興官僚の意識として何より重要なのが、④の学問を実際の政治に役立てていくという思想である。実は、これまでの引用の典故となっている『通典』の編者杜佑は、歴史学を実際の政治に役立てる学問であると位置づけ、『通典』で紹介した古今の制度史を政治に資するよう企てていた。杜佑も沈既済、趙匡と同時代人であり、これまでの議論も杜佑の説の傍証として、新興官僚の当時の見解としてまとめて記録しているのがあった。すなわち、杜佑の科挙に関する意見も趙匡や沈既済とほぼ同じものであると言っている。『通典』選挙典に引用された趙匡の意見では、上の意見を述べた後、実用の学問として、具体的にどの典籍を選びいかに読んでいくかを詳しく解説している。一方、沈既

済の意見は、中唐期の実際の政治経済問題に議論を発展させて、科挙の問題を論じている。次に、沈既済の科挙論について概観していくことにしよう。

### 三、沈既済の科挙論

官僚としての沈既済の活躍として、新旧両『唐書』本伝は、宮廷内の財政に関する意見を載せている。特に官吏への俸給の多さが、国の財政を圧迫する原因として大きいとするが、杜佑の『通典』巻十八選挙典雜議論下に紹介されている。

禮部員外郎沈既済議曰、計近代以來、爵祿失之者久矣、其失非他、在四太而已。何者。入仕之門太多、代胄之家太優、祿利之資太厚、督責之令太薄。請徵古制以明之。

唐代以降、爵位や俸給を失うものが多いというが、それは四つの「太（はなはだしいもの）」に原因があるという。すなわち、①入仕の門太多（出仕するものが甚だ多いこと）、②代胄之家太優（世襲貴族に甚だ優しいこと）、③祿利之資太厚（官吏の給料が甚だ多いこと）、④督責之令太薄（監査機能が甚だ弱いこと）の四つである。これらを古来の制度から明らかにしていきたい。

というように、沈既済は、この文に続けて四つの観点から官吏のあり方について論じているのであるが、常に意識の念頭にあったのは、農工従事者、すなわち国を支える人民たちの生活であった。

①「入仕之門太多」では、

管子曰、「夫利出一孔者、其國無敵、出二孔者、其兵不屈、出三孔者、不可以加兵、出四孔者、其國必亡。先王知其然、故塞人之養、隘其利途。」使人無游事而一其業也。而近代以來、祿利所出數十百孔、故人多歧心、疏瀉漏失而不可轄也。夫入仕者多、則農工益少、農工少則物不足、物不足則國貧。是以言入仕之門太多。(傍点筆者)

と『管子』国蓄篇の文を引用し、国家の利権をおさめるべき人が歴史を経るに従って、増えていく論を展開する。すなわち、古代は「一孔(幣)」(王が国家の利権を独り占めしていた)であったのが、次第に「二孔」(王と宰相)、以下利権は多くの人に分割されていき、それとともに国力は下がって行ったというのが管子の説である。これを戒めとして、利権掌握者の数を減らしてきたのに、唐代になると国家の財政は十、百と分割されて皇帝のみならず多くの家臣へ行き渡り、国家財政としては逼迫してしまっている。そもそも出仕する人が増え、その分農業工業従事者が減少して、生産物が不足して国を貧しくしているのである。

この対応策として、沈既済は、官僚は本当に的確な人材に限り、政治に向かない人は農業や工業に従事するように政策を考へるべきであるとしている<sup>13)</sup>。

②「代胄之家太優」では、

禮曰、「天子之元子、士也。天下無生而貴者。」則雖儲貳之尊、與士伍同。故漢王良以大司徒免歸蘭陵、後光武巡幸、始復其子孫邑中徭役、丞相之子不得蠲戶課。而近代以來、九品之家皆不征、其高蔭子弟、重承恩獎、皆端居役物、坐食百姓、其何以堪之。是以言代胄之家太優。(傍点筆者)

『礼記』効特牲篇にある「天子の元子も士なり、天下に生まれながらにして貴き者無し」という文を引用して、すでに備わっている尊敬すべき存在も実は臣下と同じである。清廉潔白であった後漢の王良でさえも最初から優遇されているわけではない。誤解により囚われ、それが解け許されて蘭陵に帰り、その後光武帝がその故郷に御幸して初めてその子孫の徭役が免除されたように、丞相の子どもでも特別扱いされることはなかったのである。それなのに、近代以降は九品の貴族は特権を思いのまま行使して、何もしないのに生活できている。それは百姓の犠牲の上にあることで、百姓たちがこれを耐えることができよ

うか。

古代の歴史を紐解くと、清廉な官僚は生まれながらにして優遇などされておらず、自分で信頼を勝ち得て初めて特別な権益を得るのである。それにもかかわらず、六朝以来一部の特権階級が何の苦勞もなく農民から搾取して生活できるようになっていく。ここで、沈既済は人は生まれながらにして能力差はないとして、誰でも努力によって貴人になれるとされていることが注目を引く。こうした人間観も新興官僚を支える意識であつたのであろう。

③「祿利之資太厚」では、

先王制士、所以理物也、置祿、所以代耕也。農工商有經營、作役之勞、而士有勤人致理之憂。雖風猷道義、士伍為貴、其苦樂利害、與農工商等不甚相遠也。後代之士、乃撞鐘鼓、樹臺榭、以極其歡、而農工鞭背、役筋力、以奉其養。得仕者如昇仙、不仕者如沈泉。歡娛憂苦、若天地之相遠也。夫上之奉養也厚、則下之徵斂也重。養厚則上覲其欲、斂重則下無其聊。故非類之人、或沒死以趣上、構姦以入官、非唯求利、亦以避害也。是以言祿利之資太厚。(傍点筆者)

先王が官吏を設けたのは、ものを治めるためで、俸給を与えるのも耕作する代わりに働くからであつた。農工商を運営してい

くのは大変で、官吏が政治を行うことも憂いがある。「風猷道義」という大義があつて官吏が尊い存在であるとしても、農工商と本質的に違う存在ではない。それなのに後世の人々は農工商業従事者を無理やり辛く働かせて、従うものは優遇してそうでないものは貶めた。そうして両者の懸隔は天と地ほどのものになつてしまい、官吏の俸給は高く、下の農工商従事者たちは重い税金に苦しめられている。この現状から今や不正を行つて官界に入ろうとする者が出てしまつている。それもただ利益を求めようとするのはなく、生活の苦難から抜け出すためなのである。

やはりここでも官吏が特別なものではないと定義している。世間が特別なものとあまりに宣伝するから、誰もが官吏登用試験を受けようになり、脱農者が増え国の生産力が低くなる。官吏だけが偉いのではなく、生産者も同様に尊敬に値するものであることを再認識する必要があると沈既済は促している。この思想は、彼の伝奇の代表作「枕中記」の主人公盧生に立身出世よりも今の充実した生活が素晴らしいと呂翁が示していることに通じるものがある。

④「督責之令太薄」では、

語曰、「陳力就列、不能者止。」昔李膺、周舉為刺史、守令畏憚、睹風投印綬者四十餘城。夫豈不懷祿而安榮哉。顧漢法之不可偷

也。自隋變選法、則雖甚愚之人、蠕蠕然、第能乘一勞、結一課、獲入選敘、則循資授職、族行之官、隨列拜揖、藏俸積祿、四周而罷、(中略)為官如此易、享祿如此厚、上法如此寬、下斂如此重、則人孰不違其害以就其利者乎。是以言督責之令太薄。(傍点筆者)

『論語』季氏篇に「力の限り任務を尽くして、できなければ辞退する」という言葉があるが、後漢の李膺が濁流の宦官政治に敢然と立ち向かったという漢代のやり方をおろそかにすべきではない。隋代になり科挙が制定されて以来、できの悪い人物でも及第し、ひとつの科目で合格してしまえば、それぞれの資質によつて職を授かり、一族の官が役人の列に並ぶようになり、財産を蓄えて、役職一巡して終わるのである。(中略)官になるのがこんなに簡単に俸給をもらうのがこんなに多く、支配階級には緩く、人民たちは重い税金に苦しむ。こうした矛盾を前に、誰がその害を間違わずにその利益を与えることができようか。

これは当時の役人の腐敗を告発している。一旦官僚になってしまえば、何もせずに俸祿を得て財を貪って死ぬまで生活できる。生産者たちの重税の上にこのような生活ができていることを忘れて、のうのうと暮らす役人を改善すべきであると沈既済は現王朝の役人の

腐敗に怒りを顕にしている。

以上の沈既済の科挙制度に対する問題提起を概観してみると、社会にはいわれなき身分制度があり、一部の労働をしない貴族をただで養っていることを糾弾していることがわかる。そして、その反面、国家を支え得る農工商を担う人民が重い税金で苦しめられている現実を提示している。このように、沈既済は学問を机上の論理遊びで終わらせず、実際の政治に活用して活用していこうという姿勢が強い。議論の中で引用される古典も、注釈のための解釈ではなく、現実の政治を読み解く一つの基準として用いられている。杜佑の『通典』がそうであったように、史学を実際の政治運営に直接役立てようという志向は、以上の選挙論に濃厚に現れていた。

これまで見てきた沈既済の則天武后に関する論、それから財政改革に関する論、本伝が伝える二つの沈既済の上奏文はともに採用されることはなかったという。そして、楊炎が両税法成立をめぐる政争の中で失脚してしまうと、沈既済も左遷されてしまったと本伝は伝える。

### むすびにかえて

建中二年(七八二)、沈既済は、志をともした仲間と南へ向かっていた。楊炎の失脚に連座して、左遷されてしまったのである。その道中に、以下のように語っている。

建中二年、既濟自左拾遺於金吳。將軍裴冀、京兆少尹孫成、戶部郎中崔需、右拾遺陸淳皆適居東南、自秦徂吳、水陸同道。時前拾遺朱放因旅遊而隨焉。浮穎涉淮、方舟沿流、晝宴夜話、各征其異說。眾君子聞任氏之事、共深歎駭、因請既濟傳之、以志異雲。沈既濟撰。

これは異類婚姻譚の名作とされる「任氏伝」の最後である。史書の形式に模したと言われる伝奇で、これはちょうど史書の論贊に当たる箇所になる。ここで物語ができた経緯を紹介しているのがつとに注目を引く。左遷される地につくまでの水路陸路の旅で、沈既濟は夜物語をしあい、実際に自分が登場人物から聞いたという狐が嫁になった話をした。一場にいた仲間たち（裴冀、孫成、崔需、陸淳）はこの物語にとっても感動し、作品として書くことを勧めてくれた。そこでこれを書いたというのである。

その場の人々は何に感動をしたのであろうか。物語展開の妙、伏線がしっかりと描かれる構成もさることながら、主人公任氏の人間性もない純粋な婦人の美德を体現していることに心打たれたのではないか。愛する鄭六のために最後まで尽くす任氏の姿は、儒学が描く理想の女性像そのものであった。沈既濟はこれまでの議論でも見たとおり、儒学の本質を社会で実現しようとして、庶民の生活に対しても温かい眼差しを持ってみている。史官でもあった彼のそうした視点で、庶民の生活を描くと、そこには儒学のあるべき理想とそれ

を妨げる現実の社会が葛藤していくものとなったのであろう。史論では則天武后の本紀立伝反対の意見が今に伝わるが、任氏の姿は、沈既濟が思い描く理想の女性像であり、それを基準に考えると、女性の立場を弁えずに暴走し、無能な文弱官僚を増やすきっかけにもなっていた則天武后時代に対しては批判的にならざるを得なかったのだと思われる。

伝奇が試験対策用の作文であるという説もあったが、左遷地へ赴く夜な夜な仲間と語り合った物語から生まれたこのエピソードを読むと、伝奇とは、新興の官僚たちが自分たちの気持ちや考えをそのまま吐露した筆の楽しみとして、皆で語らい合い、お互いに読みながら、その内容が洗練されていく、純粋な文学活動の営みであったようにも思われてくる。

邯鄲の夢として知られる「枕中記」は中央政界で活躍し左遷の経験がある沈既濟の生涯を見ると、これは実体験から出てきた感慨が込められていることが読み取れるであろう。作中、主人公の盧生は科擧不合格者という設定だが、彼は道士呂翁の与えた枕で寝てしまふと、体は小さくなり異次元空間において高速回転で自分の理想と考える一生を見通してしまふ。その中で、科擧は合格、官僚としては最高位の宰相に二回もなるといふ、浮き沈みの激しい官僚人生を歩む。出世すると周りから妬まれて失脚という描写が二回出てくるが、これは実際に沈既濟が見聞したリアルな経験なのであろう。左遷され失意の盧生は自殺さえ試みるが、こうした官界での苦悩は単

なる空想ではなく現実の政治社会そのものであった。夢の中で盧生は自分が欲しい全てを得るのであるが、目が覚めてみると、現状の農村で働く生活に「適」なるものを感じて、呂翁に感謝しつついつもの生活に戻っていく。

現実世界で、沈既済は上述のような正論を述べてそれがほぼ採用されない官僚生活を送ってきた。沈既済が自分の思想を自由に語れるのは、政治的立場やしがらみから放たれた、この伝奇の世界で、そこで史家として眺めてきた史観を遺憾なく書き綴ったのではないだろうか。

## 註

(1) 唐代文学史の歴史区分は、南宋の嚴羽の『滄浪詩話』で示された、詩風の変化から四つに分ける四変説(初唐・盛唐・中唐・晩唐)と、宋の歐陽脩らによる『新唐書』芸文志でなされた文章の変遷から三つに分けるものがある。本稿の取り扱う時代の呼称として、政治史の流れと関連する四変説が便利なので、本論ではその区分である中唐(七六六年から八三五年)を使用した。

(2) 今日伝わる所謂伝奇は晩唐の陳翰の『異聞集』十巻に収録されているが、ほぼ同時代に伝奇を収録した裴鏞の『伝奇』もある。伝奇の呼び名はこれに基づくものであるという説もある。宋代に凶書分類がされた際に、今日所謂伝奇と理解されている、恋愛物語、武俠物語、神仙・怪異物語などを広く含むものとなっていったとされる。

(3) 唐初に編まれた『隋書』経籍志では、志怪の多くは歴史書として分類されていた。隋志では諸子の一として小説家という分類もあるが、そこには志人小説、笑い話など雑多な読み物が収められている。宋代編纂の『新唐書』芸文志の分類では、子部(諸子の書物)の小説家は隋志に比べてほぼ四倍増えている(三十二部から百二十三部)。これは、歴史書と見なされていた志怪がこちらに移されたためで、この変化はそのまま唐代の小説観の変化を示している。六朝時代の作家は志怪を怪異の話も実際に起った事実として記録するものと考えていたが、唐代を経て宋代になると、それらも唐代伝奇と同じように作者が物語を創造して書いたものとして認識されるようになったことがわかる。

(4) 明の胡應麟(一五五〇―一六〇三)は、「凡變異之談、盛於六朝、然多是傳錄舛訛、未必盡幻設語、至唐人乃作意好奇、假小説以寄筆端、如毛穎南柯之類」(『少室山房筆叢』卷三十六)と、唐代伝奇に新たに加わった要素として、「幻説」(架空性)や「作意」(創作意図)があると述べている。その筆頭に韓愈の「毛穎伝」、李公佐の「南柯太守伝」を挙げている。

(5) 趙彦衛『雲麓漫鈔』卷八参照。

(6) 于天地「唐代小説的發展与行卷無干涉」(『文学遺産』一九八七・五)ではその関係性が否定されている。

(7) 陳寅恪は所謂古文運動と伝奇の関係性を述べ、それを受けて伝奇が古文を広める手段とする説も出てきているが、王運熙はその関係性を否定している(『試論唐代伝奇与古文運動的關係』(『漢魏六朝唐代文学論叢』一九八〇所収))。

(8) 『史通』卷十一 外篇古今正史篇に「長安中、餘與正諫大夫朱敬則、司劫郎中徐堅、左拾遺吳兢、奉詔更撰『唐書』、勒成八十卷。神龍中宗元。元年、又與堅、兢等重修『則天實錄』、編為三十卷」とある。

(9) 『文心雕龍』史伝篇に「及孝惠委機、呂后攝政、班史立紀、違經失實、何則。庖犧以來、未聞女帝者也。漢運所值、難為後法。牝雞無晨、武王首誓、婦無與國、齊桓著盟、宣后亂秦、呂氏危漢、豈唯政事難假、亦名號宜慎矣。張衡司史、而惑同遷固、元平二后、欲為立紀、謬亦甚矣。尋子弘雖偽、要當孝惠之嗣、孺子誠微、實繼平帝之體、二子可紀、何有於二三后哉」とある。

(10) 本文に引用した沈既済の科挙論として、その冒頭に「史氏之作、本乎懲勸、以正君臣、以維家邦。前鑑千古、後法萬代、使其生不敢差、死不妄懼。緯人倫而經世道、為百王準的、不止屬辭比事、以日系月而已。故善惡之道、在乎勸誠、勸誠之柄、存乎褒貶。是以『春秋』之義、尊卑輕重升降、幾微仿佛、雖一字二字、必有微旨存焉。況鴻名大統、其可以貸乎」(『通典』卷十八選挙典雜議論下)とある。

(11) 杜佑の『通典』食貨典では、唐代に起こっている經濟問題を解決すべく、『管子』輕重篇の思想により、農村問題の解決方法が模索されている。『管子』と『通典』の思想の関係については拙稿「『非古是今』史観と唐代諸子学の周辺」(『カルチュラル』十七卷第一号二〇二三)参照。

(12) 『論語』陽貨篇に「子曰、『唯上知與下愚不移。』」とあり、この発想から人の本性を上中下の三ランクに分類する思想が生まれた。韓愈が「原性」で規定した性三品説はそのひとつの結実したものである。特に中材の人たちは教育次第で上知にも下愚にもなりうるとし、努力をする根拠を与える考え方を

になり、新興官僚たちの勉学を支える認識となっていた。

(13) 沈既済はその対策として、「既済以為當輕其祿利、重其督責、使不才之人、雖虛座設位、置印綬於旁、揖讓而進授之、不敢受。寬其征徭、安其田里、使農商百工各樂其業、雖以官誘之、而莫肯易。如此、則規求之志不禁而息、多士之門不扃而閉。若上不急其令、下不寬其徭、而欲以法術遮列、禁人姦冒、此猶坏土以壅橫流也、勢必不止」(『通典』卷十八選挙典雜議論下)と官吏の俸給を減らし任務に対する督責を重くすべきであるとしている。こうすることにより、不才の人は宮中からいなくなり、農工商従事者の税も軽くなり、人民は仕官に興味を失い自分たちの專業の仕事を楽しむようになるはずだとする。これも「枕中伝」に見える「適」の境地に近い心境を述べている。